

瀬戸博士「シェイクスピア作品ではないもの」の事実

樽 本 照 雄

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」
(瀬戸宏『中国のシェイクスピア』2016)

瀬戸博士はこう書いて林紓を批判する。

「シェイクスピア作品ではないもの」とは、ラム姉弟『シェイクスピア物語』
とクイラー＝クーチが莎氏歴史劇を小説化した複数の作品を指す。

林紓は底本としたラムとクイラー＝クーチの名前を出さなかった。漢訳イブセンのドレイコット・M・デルも同様。瀬戸博士によるとそれが林紓批判者たちの誤解、錯覚を引き起こしたという。劉半農、鄭振鐸らは林紓に騙された人々になる。銭玄同、胡適、阿英たちも犠牲者だ。瀬戸博士を含む研究者全員を欺いた責任はすべて林紓にある。瀬戸博士の見解ははっきりしている。林紓は「詐欺師」だという意味だ。

文明戯シェイクスピアも同じくラムの名前を出さない。それどころかラム本の林訳から台詞は創作した。だが、これについては博士独自の論理を適用しない。瀬戸博士の基準によれば、文明戯関係者は「詐欺師」ではないらしい。これを評価の二重基準という。

私は、次のように書いた。「瀬戸博士は林紓批判はしても文明戯については批判をしない。この評価における二重基準は研究者としては致命的な欠陥だ。自爆をしている」

従来は濡れ衣を着せられた林紘を中心に述べてきた。本稿は林紘批判派の立論について紹介する。以前と重複する部分がある。ご了解いただきたい。

おさらいをする。

中国において劉半農と鄭振鐸が代表する林紘批判派（文学革命派）は、林紘が「戯曲と小説の区別がつかない」と主張してそこに批判の論拠のひとつを設定した。「区別がつかない論」を掲げる目的は、林紘が文芸について無知であることを強調するためだ。当時「現代の文豪 [當代文豪]」と称賛された林紘は無知だと非難したかった。

「戯曲と小説の区別がつかない」の表現を変えたのが瀬戸博士の上記「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」だ。「シェイクスピア作品ではないもの」がラム本、クイラー=クーチ本を指す。「シェイクスピア作品」はそのまま莎劇である。

瀬戸博士の言いかえには、実は重要な意味の変更がある。林紘に対する見方の強引な歪曲だ。中国の文学革命派が主張していた林紘の無知は姿を消す。瀬戸博士は、林紘は無知ではなく意図的に漢訳底本の作者を隠ぺいしたというのだ。そこには林紘に対する瀬戸博士の強い悪意が表出している。

瀬戸博士がそのようにわざわざ言いかえた意図は、林紘を「詐欺師」に認定するためだ。林紘は積極的に読者、研究者を騙した。今までの研究者は、林紘を無知であると批判して林紘に対しては加害者であった。しかし、林紘は嘘をついていたということに転換させる。虚偽であるものを読者、研究者にわざと提供したと断定する。読者、研究者の全員は林紘に騙されたことにする。その瞬間に林紘を批判していた研究者は加害者から被害者へと変身する。瀬戸博士は林紘に騙された被害者のひとりだから何を言っても許されるという認識だ。被害者は加害者よりも精神的な優位に立つらしい。奇妙な論理だと思う。しかし、瀬戸博士ご本人がそう固く考えている。文章を読めばそうなる。

まとめる。

事実はひとつだ。林訳ラム本にはラムの名前はない。この事実を中国の文学革命派は林紘の「無知」だと批判した。ところが日本の瀬戸博士は、林紘が「詐欺」を働いたと強調した。瀬戸博士の悪意が全開している。

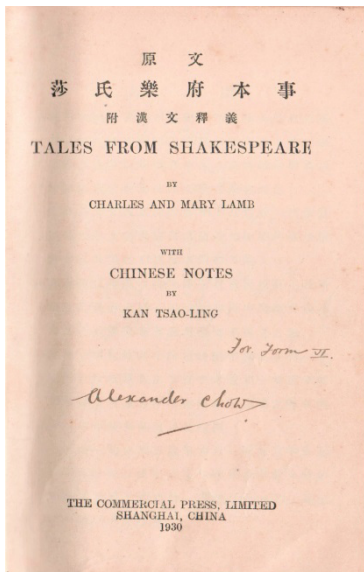
ラム本のばあい

なんどでも振りかえる。

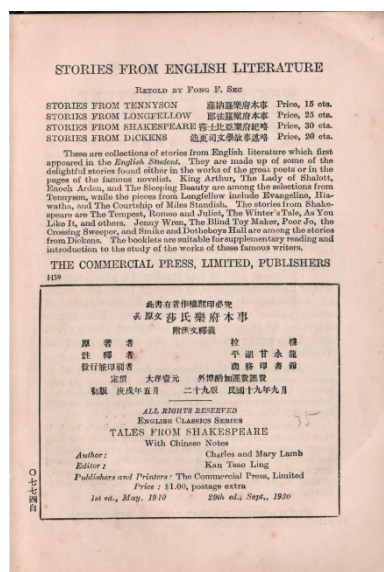
王敬軒（錢玄同）と劉半農が組んで展開したのが「なれあいの芝居 [双簧戯]」だ。手紙による問答の形で『新青年』第4巻第3号（1918）に掲載した。そのなかで林紓批判の根拠として具体的に提出した作品のひとつが林訳『吟辺燕語』だ。ラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本にしたが、林紓はラム姉弟の名前を出さなかった。当時の翻訳習慣からすれば別に特異なことではない。だが、錢玄同と劉半農はそこをつかんだ。林紓は「豆と麦の区別もつかない [不辨菽麦]」。莎劇を小説に書き換えて翻訳したと批判する原型を提示した。長年言われてきているから周知のことだろう。

錢玄同と劉半農は北京大学教授だ。ふたりともに『吟辺燕語』の底本がラム本であったことを知らないはずがない。

林訳批判が提出される以前から、中国においてラム姉弟『シェイクスピア物語』の原文は広く流布している。読む気があれば普通に英語で読むことができた。英語学習用に刊行されている。拉穆著、平湖甘永龍註訳『原文莎氏樂府本事附漢文積義』（上海・商務印書館1910）である。「莎氏」はシェイクスピア、「樂府」が戯劇、「本事」は物語。訳せば「シェイクスピア戯劇物語」となる。



扉



奥付

北京大学の学生でさえ『吟辺燕語』がラム本を底本にしていることを知っていた（『吳宓日記』1911年分）。

また、莎劇についての評論も発表されている。東潤（朱世溱）「莎氏楽府談」（『太平洋』第5-9号、1917-1918）という。そこでは林訳『吟辺燕語』への言及がある。

中国におけるラム本については、そういう周囲の状況だった。『吟辺燕語』にラム姉弟の名前がなくとも底本がラム本であることは中国の知識人であればわかっていたはずだ。

銭劉ふたりの「なれあいの芝居」に続いて登場したのはこれも北京大学教授の胡適だった。胡適も銭劉にならって知らぬ顔でわざわざ林訳を批判した。『吟辺燕語』について発言しているのは確実だ。

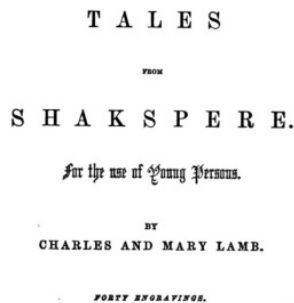
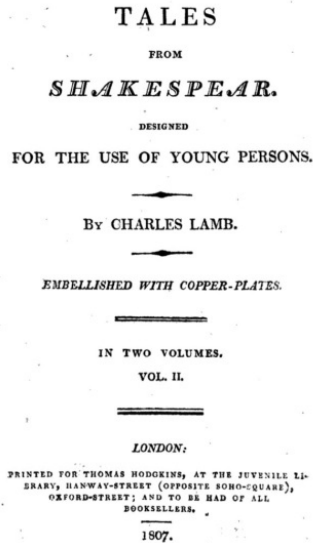
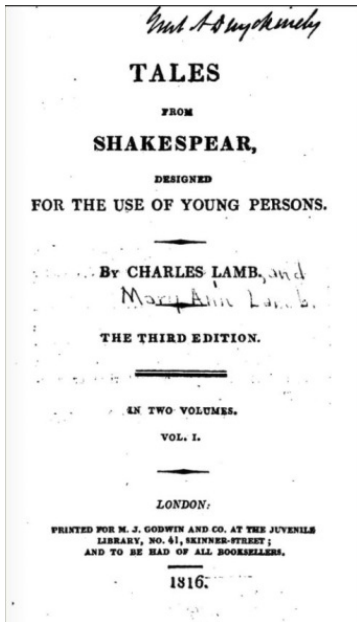
林琴南はシェイクスピア [Shakespear^マ] の戯曲を記述体の古文に翻訳した！これは本当にシェイクスピアにとっての大罪人である

林琴南把 Shakespear^マ 的戯曲訳成了記叙体的古文！這真是 Shakespear^マ 的大罪人。「建設的文学革命論」『新青年』第4卷第4号

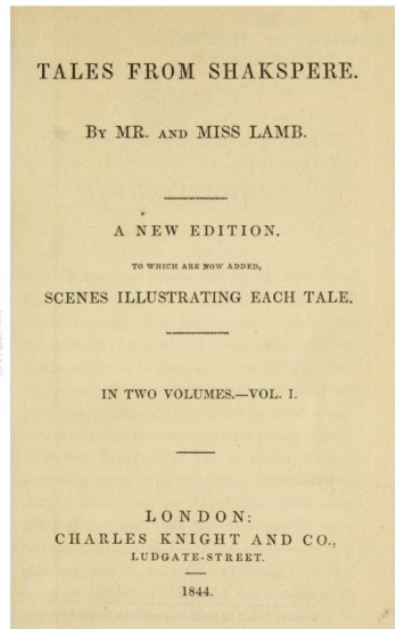
瀬戸博士は「胡適の文学素養からみて『シェイクスピア物語』を知らなかったとは考えにくい」（99頁）と書く。「考えにくい」どころか胡適が記述した Shakespear^マ という綴りはラム本に見られる。胡適が示したのはラム本にほかならない。瀬戸博士は「ここでの記述は一九一六年『雷差得紀』以下の翻訳を指しているのであろう」（99頁）と説明してクイラー=クーチ本を示唆する。しかし、該書の書名は『HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE』だ。胡適が示した Shakespear^マ ではない。アメリカ留学帰りの北京大学教授胡適が間違っ箇所ではないだろう。

ラム本シェイクスピアの綴りにはいくつかの種類がある。「海外奇譚叙例」に書かれているのは「Tales From Shakspere^マ」だ。研究者のひとり（宋莉華を指す）が、Shakspere は誤りだと書いて漢訳者の無知を嘲笑した。実際にそう綴るラム本が存在することを知らない。

文学革命派は、ラム本の存在を知りながらラムの名前がないことをテコにして



New York:
C. S. FRANCIS & CO., 252 BROADWAY.
BOSTON:—CROSBY, NICHOLS & CO
M.DCCC.LV.



Tales From Shakspere.

林紓を批判した。その根底には、林紓を無理矢理保守派の代表者に指名し何があんでも批判するという明確で強い意図が存在する。

この事実を瀬戸博士が示した語句を使用して説明しよう。

文学革命派は林訳『吟辺燕語』が「シェイクスピア作品ではないもの」だと知っていた。知ってはいたが、林紓がラムの名前を出さなかったことに便乗してそれ「をシェイクスピア作品として紹介した」といって林紓を批判した。

瀬戸博士が林紓を「詐欺師」だと非難するために作り出した語句は、文学革命派に対して一層適合して当てはまる。文学革命派は林紓とは異なり意図的に知らぬ風を装った。ラム名がないことをわざと林紓批判の根拠にしたのだ。瀬戸博士は自分の語句を林紓にではなく文学革命派にこそ献上すべきだった。そうすれば文学革命派の悪辣さをより明瞭にすることになっただろう。瀬戸博士にかわって私が実行した。

「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」を林紓に対して使用すれば、それは嘘になる。だが、文学革命派に適用すれば事実となる。文学革命派こそがラム本、クイラー=クーチ本という「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」人々であるからだ。

瀬戸博士の説明を文学革命派に対応させると、林紓には批判される理由がないことがわかる。瀬戸博士がどのように否定しようとも林紓冤罪事件なのだ。

クイラー=クーチ本のばあい

鄭振鐸は「区別がつかない論」を主張した中心人物だ。

林訳シェイクスピア、林訳イプセンは戯曲から直接漢訳して小説化したと彼は説明した。鄭振鐸「林琴南先生」(『小説月報』第15巻第11号、1924)である。文章は林紓を追悼する形をとっている。しかし、鄭振鐸こそ「林紓にとっての大罪人〔林紓的大罪人〕」にほかならない。

鄭振鐸は商務印書館に勤務し『小説月報』の編集長だった。林訳は1903年の『伊索寓言』から商務印書館がその多くを刊行し続けている。林訳は「説部叢書」に収録され、特別に集めて「林訳小説叢書」を出版した。林紓の死後も単行本は出版されている。林紓は商務印書館の創業者たちと深い人間関係で結ばれていた。その事実と背景を知っている読者、研究者は、鄭振鐸の文章が商務印書館の林紓に対する公式な態度表明だと受け止めたであろう。鄭振鐸は商務印書館の内部情報をにぎっているはずだ。林訳シェイクスピア、林訳イプセンに関しても表面に

出てこない事実を知っているだろう。その彼が林紓について「区別がつかない論」を唱えるのだから決定的だといえる。誤りであるはずがないと誰もが思い込んだ。

だからこそ2007年に林訳シェイクスピアの底本がクイラー＝クーチ本であり、林訳イプセンの底本がドレイコット・M・デル本だとする指摘があるまで、83年間にわたって研究者全員が鄭振鐸の誤りに気付かなかった。

鄭振鐸は自らの無知にもとづいて林紓を非難したのだ。鄭振鐸こそはまさに「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」といって林紓を批判した人物だった。

鄭振鐸が底本の存在を知らなかったのはしかたがない、と私は考えない。鄭振鐸を擁護支持するならば、その研究者は中国学界の追随者だ。今までの林紓批判とかかわるところがない。だいいち、林紓冤罪事件をどう考えるのか。

林訳の底本が明らかにされたあとも林紓について「シェイクスピア作品ではないものをシェイクスピア作品として紹介した」と主張する瀬戸博士は自爆しているという自覚がないのだろう。あいかわらず中国学界に事大して林紓批判の報告を行っていると思われる。

林紓をめぐる瀬戸博士の言説は、研究が政治に奉仕する中国学界では通用するかもしれない。しかし、日本を含む学問研究の世界では無効なのである。